



園は育ち合う場、家庭はホッとできる場

保育園では日々、子どもたちが生活を自分たちで作リ、遊びをみんなで楽しめるよう関わっています。一泊二日の年長のお泊まり保育も、これまでの生活や遊びの知恵を詰め合わせた本気の体験活動です。

子どもたちにとって「家庭から離れて泊まること」は、大人の予想以上に不安を感じるものです。その不安を知り、何をしたら子どもたちが期待を持って向かっていけるか？相談をしながら何度も話し合いを行いました。

虫に興味のある子が多かったので、虫を捕まえるために知恵を出し合い、白い布に光を当てる装置を考えたり、虫の好きな蜜を置いて罠を仕掛けたりしながら虫が引っかかるのを楽しみにしました。他にも夏ならではの花火やスイカ割、夜にお風呂代わりのナイトプールを計画し当日を迎えました。

先日、東京の保育施設「りんごの木」の代表 柴田 愛子氏が講演会で「子どもたちは、ハラハラ・ドキドキ（不安）の上に、ワクワク（期待）がある。」とおっしゃっていました。

ここで言う不安は、ただ怖いと違います。子ども自身が“大丈夫かな？どうかな？”と今起きている出来事と自分の能力を見定め、“こうしたらいいのではないかな？”“もし、こうだったら、こうすれば平気”と思考を巡らせ、“できる”と思った時に不安を超えて挑戦しようとする気持ちです。

やってみて上手くいく時もありますし、力不足で失敗することもあります。失敗した時は、なぜ上手くいかなかったのかを振り返り、また挑戦します。私たちは“もう少し”“あと少し”と、子どもがワクワクして“やってみよう”と意欲が湧いた事を大切にしたいと考えます。

保育園は育ち合う場所です。子ども自身が思考を巡らせて、自分の気持ちと向き合うことと同時に、一人で解決できないことを仲間の声で気がついたり、励まされたりして乗り越えようとすることに、集団で過ごす意味があると思っています。

乳児期は言葉で伝えられず手が出てしまう事もありますが、保育者がお互いの思いを言葉で伝え、自分の気持ちを知ること、相手にも気持ちがあることが伝わるようにしています。

幼児期は言葉で伝えられますが、充分ではありません。保育者は、子ども同士に思いの行き違いがあった時は「Aくんは、〇〇って思ったんだね。」「Bちゃんは、□□って思うんだよね。」と互いの思いは伝えるけれども、解決はしません。

どう解決するかは子どもたちが決めます。その場で綺麗に解決しなくても、相手の思いを知って、子どもたちなりに譲歩した行動を取るようになります。子どもの挑戦する気持ちと、仲間と共に育ち合う関係性をこれからも大切にしていきたいと思ひます。

そして、子どもたちにとって家庭はホッとできる場所です。子どもたちが自分の気持ちを整理するには、誰かに話す必要があります。だからこそ、家庭では十分に、お話を聞いて欲しいのです。人は嬉しい事よりも、嫌だったことの方が印象に残ります。子どもたちも嫌なことを聞いてもらって、心を保とうとします。

お友だちのことを悪く言う姿も、家庭ではあることでしょう。そのことに大人が共感し過ぎると、子どもは“分かってもらえた”“お話を真剣に聞いてくれた”と思い、悪い事ばかり伝えるようになります。時に話を作ったり、大きくしたりすることもあります。

楽しい事、嬉しい事を聞きたい時は、嫌な事のお話を聞いてあげてから「ところで今日、何が一番楽しかった？」と聞いて、楽しい気持ちのまま1日を終わられると良いな、と思ひます。

